

別名端谷 I 遺跡 2 次調査における古代の土器埋納遺構について

青木聰志

1 はじめに—別名端谷 I 遺跡2次調査の概要—

別名端谷Ⅰ遺跡は愛媛県今治市別名字端谷に所在し、令和4年度に一般国道196号今治道路・市道別名矢田線の整備に伴って、2次調査が実施された^{*1}。本遺跡は日高丘陵南部に位置し、丘陵南部に形成された小開析谷の入り口および東側丘陵斜面に立地している(図1)。1次調査地は、谷の奥部付近の西側斜面に位置し、今治新都市開発に伴い平成14年度に発掘調査が実施された(池尻他編2007)。『倉正私印』の銘をもつ銅印や8世紀～9世紀の鍛冶炉が検出されている。その他にも、本遺跡の南西側の谷に位置する別名寺谷Ⅰ遺跡では、別名端谷Ⅰ遺跡1次調査と同時期の鍛冶炉(9世紀～10世紀ごろ)が検出され、高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡では、四国初の製鉄炉(7世紀後半～8世紀前半)が発見されているように、日高丘陵一帯には古代の官営工房が存在していた可能性が想定されている。

別名端谷 I 遺跡2次調査では、遺構面が2面あり、弥生時代後期、古代(8世紀～11世紀)、中世(15世紀～16世紀)の遺構が確認されている。弥生時代後期では、段状遺構が丘陵斜面を中心に展開していることが判明した。古代では、本稿で言及する土器埋納遺構のほか、県内ではあまり類例をみない、剣物を水溜および井戸側として使用し、その外側にさらに石積みが巡る、11世紀頃の石組みの組み合わせ井戸が検出されている。中世では、丘陵斜面に平坦面を造成し、そこに3間×5間の総柱建物などの規模の大きい建物が確認され、集落が経営されていることが判明した(青木2023)。

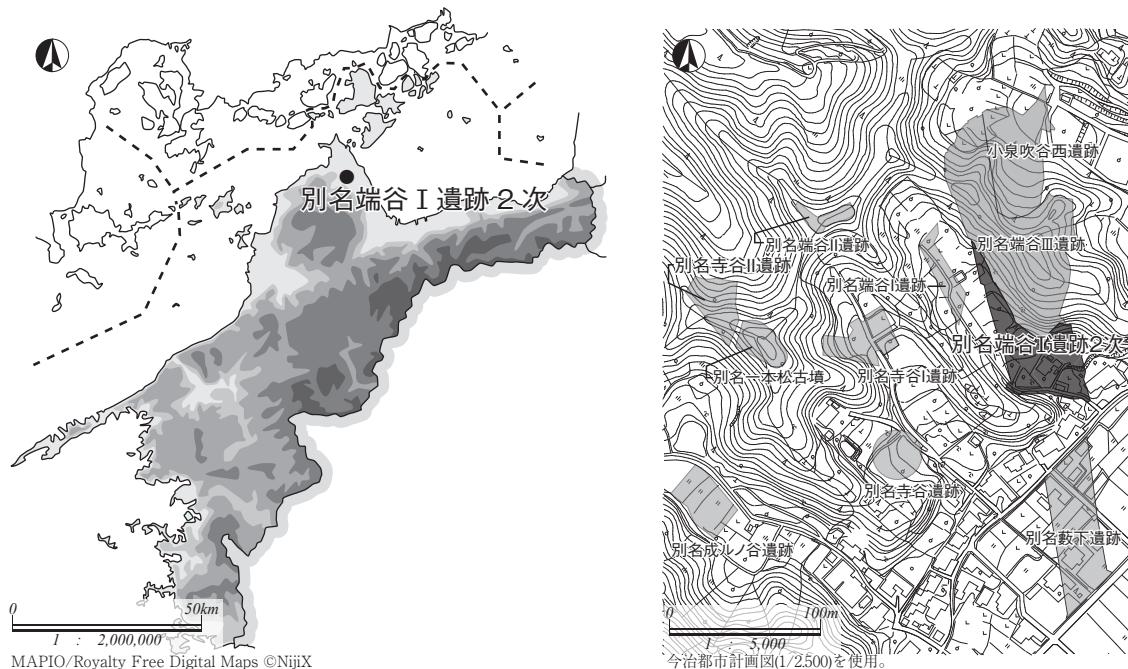


図 1 別名端谷 I 遺跡 2 次調査の位置と周辺遺跡

2 土器埋納遺構の出土状況と時期

(1) 土器埋納遺構の出土状況

土器埋納遺構(SP36)は1区の北側で検出された(図2)。1区は本遺跡で最も北に位置する調査区であり、丘陵の西側斜面に位置している。調査区の北側は斜面の傾斜の角度が緩やかであるのに対し、南側では東から西に向かって斜面の角度がやや急になっている。1区では、遺構面が2面確認

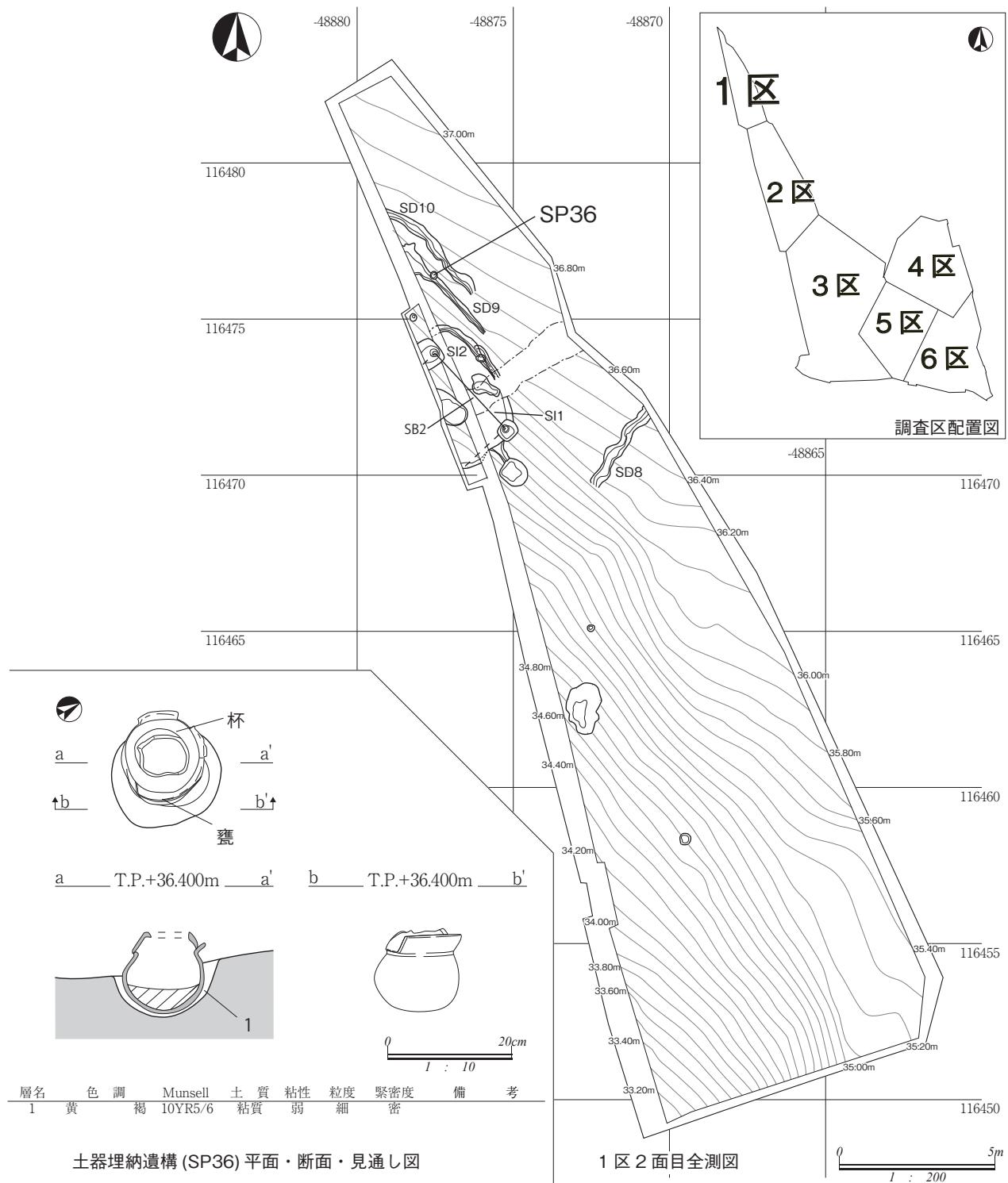


図2 別名端谷I遺跡2次調査1区2面目全測図・土器埋納遺構(SP36)平面・断面・見通し図

され、1面目の時期は中世後半(15世紀～16世紀)であり、2面目では弥生時代後期と古代(7世紀後半～9世紀)の遺構が検出された。古代の主要な遺構には、SB2、SI1、SI2、SD9、SD10があり、いずれも調査区の北側に位置している。SB2は柱穴の平面形が隅丸方形を呈する掘立柱建物であり、1間の規模は3.4mを測る。調査区内では、梁行の規模しか確認できておらず、桁行側は調査区外にのびているため、その全容は不明である。SI1とSI2はいずれも平面形が隅丸方形の竪穴建物であり、SI2は周壁溝が巡る。近現代の攪乱により、それらの重複関係およびその全容は不明である。SI1はSB2に切られている。SD9は検出長3.50m、幅0.17～0.58m、深さ0.08m、SD10は検出長3.85m、幅0.19～0.42m、深さ0.13mを測る。いずれも等高線に沿って遺構が形成され、丘陵斜面から流れてくる水を排水するための機能が想定される。

土器埋納遺構(SP36)は、標高36.287mに位置し、小穴の平面形は円形である。SD9と重複しており、土器埋納遺構(SP36)がSD9より先行している。土器埋納遺構(SP36)の規模は長径0.18m、短径0.17m、深さ0.09mを測り、埋土は単層である(図2)。遺構埋土やその周辺では、被熱面や炭層、灰層などは確認できていない。この遺構は、土師質土器の甕と杯で構成されている。甕は小穴の床面直上に正位に埋設され、その上に杯を逆さまにして蓋にした状態で検出された。甕の内部には底部から約3.0cmほど土壤が堆積しており、この土壤は非常に締りが良く、特に底部に近い箇所では土壤が固結していた。この土壤内では灰や骨片、炭化物などを確認できていない²。土器埋納遺構(SP36)の出土状況および断ち割り状況が写真1である。本遺構は、包含層を人力で掘削していた際に、土師質土器杯の底部が確認された。その際に遺構検出を行ったが、遺構埋土を識別することが困難であったため、周囲を掘り下げて遺構プランが明確に判明した面で遺構検出を実施した。そのため、本来の小穴はもう少し高い位置から掘り込まれていた可能性が高い。出土状況写真に見られる土師質土器杯の底部の欠損は、検出時に掘削道具である手鋤が土師質土器杯の底部に当たり、欠けてしまった。そのため、土師質土器杯は意図的に打ち欠いたり、穿孔して埋納されたのではない。

以上の状況から、小穴に土師質土器甕を意図的に埋設し、その上に蓋として土師質土器杯を使用している土器埋納遺構であると判断される。

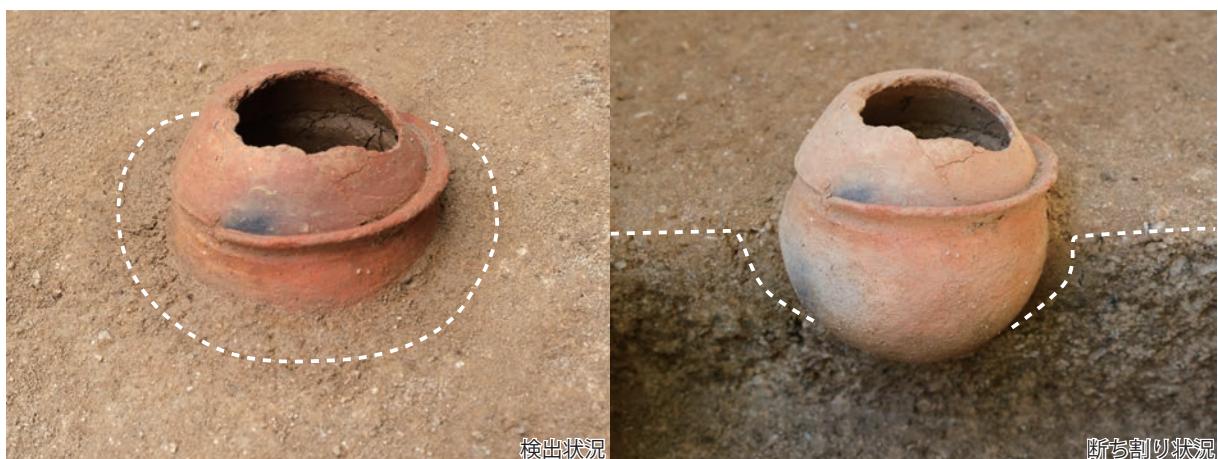


写真1 土器埋納遺構(SP36) 検出状況(左)、断ち割り状況(右)
(破線で地山と遺構埋土の境界を表示)

(2) 土器埋納遺構(SP36)の出土遺物と時期

土器埋納遺構(SP36)の出土土器の実測図が図3である。土師質土器杯(1)は口径12.0cm、器高4.0cm、底径6.6cmを測る。前述したように、底部は掘削中に欠けてしまったため、残存状況が良好とはいえない。内外面ともに回転ナデ調整が施され、口縁部は外方へ直線的に開き、端部は丸くおさまる。外面には弱いロクロ目が観察される。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。土師質土器甕(2)は、口径13.3cm、器高10.6cm、胴部最大径13.2cmを測り、完形品である。底部から体部にかけて球形に膨らみ、口縁部と体部の外面付近にはナデ調整に伴う弱い段がみられる。口縁部はくの字状に短く開き、端部は丸みをおびている。口縁部および胴部では、内外面ともにナデ調整が施され、底部内面には指頭圧痕が観察できる。口縁部と体部内面の境付近には、一部面がみられ、何かしらの工具を用いたナデ調整が想定される。

以上の特徴より、土師質土器杯は青木分類(青木2020)のAaに類似しており、9世紀に比定される。土師質土器甕は、愛媛県では古代の煮炊具の編年が確立されていないため、時期比定が困難である。この甕のような口径13.0cm前後、器高11.0cm前後の形態は、愛媛県内でもあまりみられないが、9世紀～10世紀前半を中心に確認できる。この土器埋納遺構の時期は土師質土器杯や甕の形態から9世紀の年代が想定される。

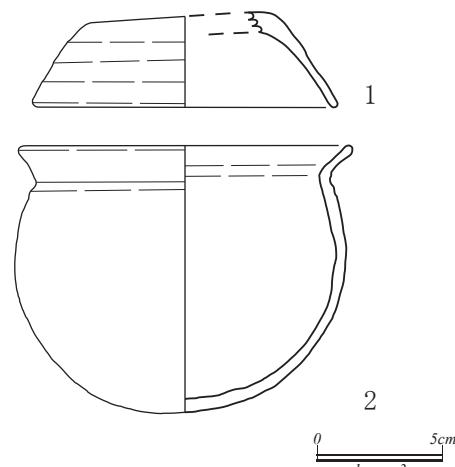


図3 土器埋納遺構 (SP36) 出土遺物実測図

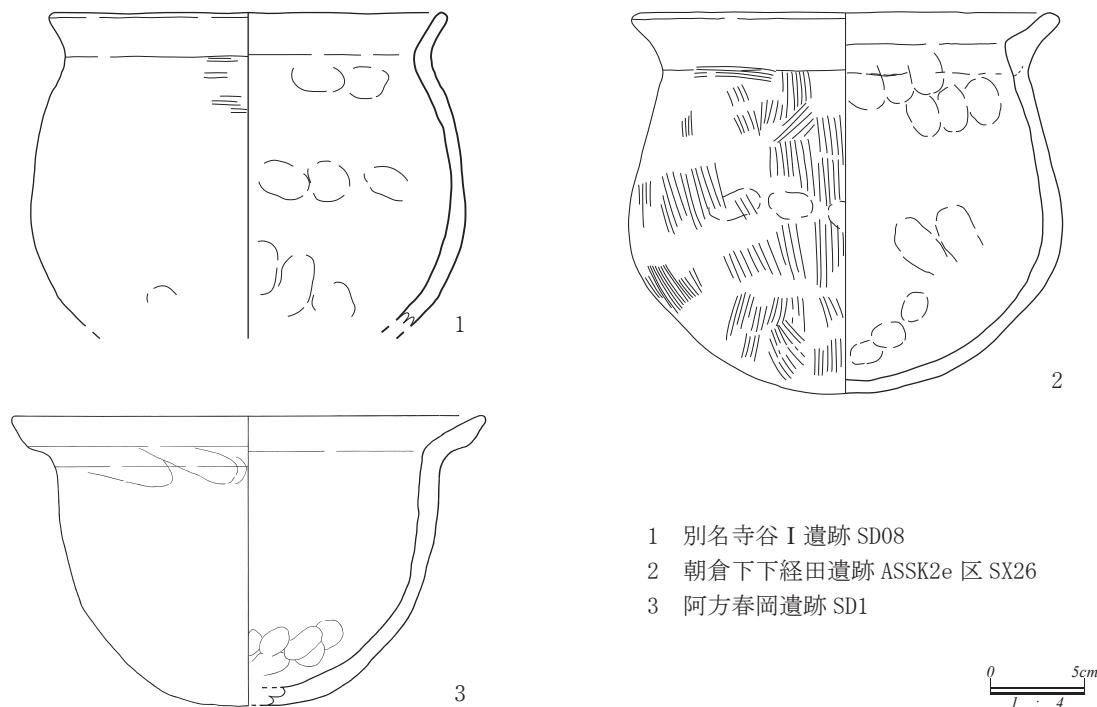


図4 愛媛県内における古代の小型の土師質土器甕

3 X線撮影と脂肪酸分析

土師質土器甕の内部には固結した土壤がみられた。この土壤に副葬品や何らかの内容物が存在している可能性が想定された。これらを把握するために、X線撮影と脂肪酸分析を実施した。

(1) X線撮影の結果

愛媛大学アジア古代産業考古学研究センターの村上恭通先生と筮田朋孝先生に依頼し、2022年6月14日にX線撮影を実施した。

撮影では、土師質土器甕に対して上方と側面にX線を照射した。その結果が写真2である。まず、X線を上方から照射して土師質土器甕の内容物を確認したところ、写真の中央付近で三角形状のものを確認することができた。次に、側面にX線を照射したところ、X線に対して反応するものが何も存在しなかった。

以上より、上から照射した際に確認できた三角形状のものは非常に薄いもの、あるいは撮影時のエラーであることが推測され、銭貨や玉、鉄製品などの副葬品は確認できなかった。

(2) 脂肪酸分析の結果

内容物に関する情報を得るために、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、2022年10月に脂肪酸分析を実施した。分析では、土器内底部の土と遺構内埋土の2点を扱い、各試料から50g程度を分析に用いた。以下の記述はパリノ・サーヴェイ株式会社の報告文(パリノ・サーヴェイ株式会社2022)を抜粋し、一部加筆している。

分析方法は、AOAC INTERNATIONAL method 996.06に従っている。脂質を溶媒(クロロホルム-ジエチルエーテル)で抽出したあと、メチル化し、GC/FID法にて測定を行った。比較検討に用いた標準物質は、飽和脂肪酸が、酪酸(C4 : 0)、カプロン酸(C6 : 0)、カプリル酸(C8 : 0)、カプリン酸(C10 : 0)、ラウリン酸(C12 : 0)、トリデカン酸(C13 : 0)、ミリスチン酸(C14 : 0)、ペンタデカン酸(C15 : 0)、パルミチン酸(C16 : 0)、ヘプタデカン酸(C17 : 0)、ステアリン酸(C18 : 0)、ア

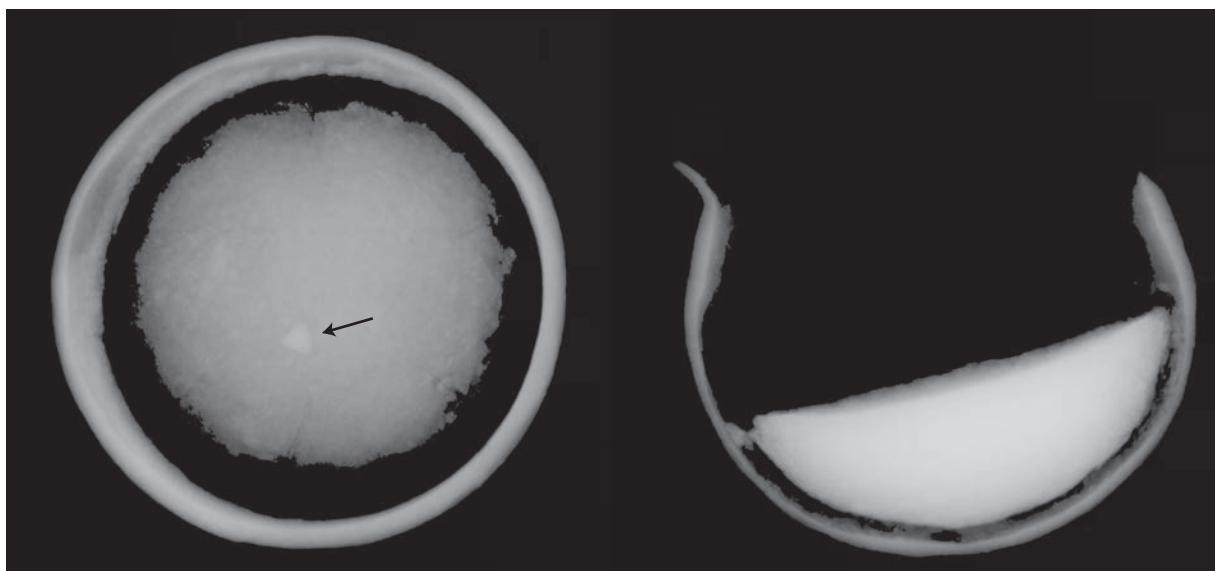


写真2 土師質土器甕 X線撮影(左:上から 右:側面から)
(愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター提供)

ラキジン酸(C20:0)、ベヘン酸(C22:0)、リグノセリン酸(C24:0)である。不飽和脂肪酸は、ミリストレイン酸(C14:1)、ペントデセン酸(C15:1)、パルミトレイン酸(C16:1)、ヘプタデセン酸(C17:1)、オレイン酸(C18:1)、エイコセン酸(C20:1)、エルカ酸(C22:1)、セラコレイン酸(C24:1)、リノール酸(C18:2)、 γ -リノレン酸(C18:3)、 α -リノレン酸(C18:3)、エイコサジエン酸(C20:2)、エイコサトリエン酸(C20:3)、アラキドン酸(C20:4)、エイコサペンタエン酸(C20:5)、ドコサジエン酸(C22:2)、ドコサヘキサエン酸(C22:6)である。

100gあたりの脂肪酸量に換算した値を表1に示している。表にみられるように、土器内の土壤ならびに遺構内の埋土からは脂肪酸がほとんど検出されず、わずかにパルミチン酸(C16:0)が検出されるのみである。

パルミチン酸は、動物、植物双方に含まれる脂肪酸である。化学的に安定であるため、土壤の脂肪酸分析において高率にみられることが多い(坂井・小林1995)。おそらく、今回検出された脂肪酸は、腐植や土壤生物由来の脂肪酸であり、埋納物等に由来しないと思われる。

表1 脂肪酸分析結果

		土器内	遺構内
飽和脂肪酸			
酪酸	C 4:0	-	-
カプロン酸	C 6:0	-	-
カブリル酸	C 8:0	-	-
カブリン酸	C10:0	-	-
ラウリン酸	C12:0	-	-
トリデカン酸	C13:0	-	-
ミリストン酸	C14:0	-	-
ペントデカン酸	C15:0	-	-
パルミチニン酸	C16:0	0.1	0.1
ヘプタデカン酸	C17:0	-	-
ステアリン酸	C18:0	-	-
アラキジン酸	C20:0	-	-
ベヘン酸	C22:0	-	-
リグノセリン酸	C24:0	-	-
不飽和脂肪酸			
ミリストレイン酸	C14:1	-	-
ペントデセン酸	C15:1	-	-
パルミトレイン酸	C16:1	-	-
ヘプタデセン酸	C17:1	-	-
オレイン酸	C18:1	-	-
エイコセン酸	C20:1	-	-
エルカ酸	C22:1	-	-
セラコレイン酸	C24:1	-	-
リノール酸	C18:2	-	-
γ -リノレン酸	C18:3	-	-
α -リノレン酸	C18:3	-	-
エイコサジエン酸	C20:2	-	-
エイコサトリエン酸	C20:3	-	-
アラキドン酸	C20:4	-	-
エイコサペンタエン酸	C20:5	-	-
ドコサジエン酸	C22:2	-	-
ドコサヘキサエン酸	C22:6	-	-

*慣用名が存在しないものは、系統名で示す。

*数値は100gあたりのg数で示す。-は未検出。

4 愛媛県の土器埋納遺構の類例と別名端谷I遺跡2次調査の土器埋納遺構(SP36)の評価

別名端谷I遺跡2次調査で確認された土器埋納遺構(SP36)の評価をするため、愛媛県内の古代の土器埋納遺構の集成を試みた。集成した土器埋納遺構の基準としては、久世康博氏が論じているように、単に遺物が投棄されたような状況ではなく、意図的に埋められた状態で発見されている遺構(久世1999)を対象とした。愛媛県の古代の土器埋納遺構は、9遺跡13箇所を確認することができた(図5、表2)。これらの遺構では、骨蔵器、火葬墓、柱穴祭祀の性格が考えられている。

愛媛県内の土器埋納遺構を参照しながら、別名端谷I遺跡2次調査の土器埋納遺構の性格を考えたい。最初に柱穴祭祀について検討する。柱穴祭祀と考えられている遺構では、土師質土器杯が重ねられている例(本郷遺跡)や、杯の上に石を置いている例(大久保遺跡)のように、土器埋納遺構(SP36)とは出土状況が明らかに異なる。また、本遺構では、土層観察で柱の掘方や柱当たりの痕跡が見られないため、柱穴とは考えにくく、柱穴祭祀の可能性は低いと推察される。

次に骨蔵器・火葬墓について検討する。愛媛県内で骨蔵器・火葬墓と考えられている遺構は、正岡睦夫氏によって集成され、1997年時点での基確認されている(正岡1997)。骨蔵器・火葬墓として位置付けられている遺構には、主に須恵器壺や甕の口頸部を打ち欠き、その上に土師質土器の杯(朝倉南甲遺跡など)や須恵器の杯蓋(法花寺蔵骨器Aなど)で蓋をしていたり、蓋をせずに須

恵器甕や壺をそのまま埋納している事例がある。また、柏木古墓では、遺物の周辺から炭が多数出土し(正岡1996、1997)、朝倉南甲遺跡では、壺の中に火葬された人骨が存在し、内部に灰がみられることが報告されている(谷若編1986)。別名端谷Ⅰ遺跡2次調査で出土した土器埋納遺構(SP36)の土器内の埋土では、灰や人骨、炭化物を確認できていない。また、遺構埋土やその周辺では、炭や被熱面などは確認できていない。骨蔵器や火葬墓であると仮定するならば、土師器甕を骨蔵器とし、それを地中に直接埋置している、小田裕樹氏が分類したⅢ型火葬墓(小田2011)に比定され、小田氏によると、8世紀後半～9世紀にかけて増加してくるようである。

最後に胞衣壺について検討する。胞衣壺は人間の胎盤や後産を埋納する際に納める容器のことである。愛媛県では類例がないため、周辺地域の事例から考えたい(図6)。

稻木遺跡は香川県善通寺市に所在する遺跡である(西岡編1989)。SX13は土師質土器甕1個体を埋設した土坑であり、甕の内部から硬質の土師質土器皿1点と、皿内部に銭文を表にした状態の銅銭5枚(いずれも「承和昌宝」)が検出されている。なお、蓋状の施設の存在は認められていない。

表2 愛媛県内の土器埋納遺構集成

遺跡名	遺構名	場所	出土遺物	性格	備考	報告書
本郷遺跡	SP23	愛媛県新居浜市	土師質土器杯4枚	祭祀	土師質土器杯4枚が重ねられた状態で出土。柱の抜き取り後に埋納されている。	真鍋編2010
本郷遺跡	SP70	愛媛県新居浜市	土師質土器杯4枚	祭祀	土師質土器杯4枚が重ねられた状態で出土。柱の抜き取り後に埋納されている。	真鍋編2010
本郷遺跡	SK11	愛媛県新居浜市	須恵器甕	火葬墓?	底部と胴部の半身を欠くが、口縁部は完存。坑底に沿って潰れた状態で出土し、意図的に破壊して埋設。この個体の被片がSK1からも出土している。SK1は火葬墓に類する施設である可能性が高いと評価されている。	真鍋編2010
柏木古墓		愛媛県西条市 小松町	土器2個(土師質土器甕、もう一つは破損していたため廃棄される)、和同開珎12枚(現存7枚)	骨蔵器	開墾中偶然発見 和同開珎は土器の近くから出土。	正岡1996
大久保遺跡	2B区SK-05	愛媛県西条市 小松町	赤色塗彩土師器杯	祭祀	柱穴の可能性あり。基底面から完形の赤色塗彩土師器杯が出土し、その上に石が置かれている。	柴田他編2008
大久保遺跡	2B区SK-06	愛媛県西条市 小松町	赤色塗彩土師器杯	祭祀	柱穴の可能性あり。やや浮いた状態で完形の赤色塗彩土師器が出土し、その上に石が置かれた状態で出土。	柴田他編2008
朝倉南甲遺跡	火葬墓	愛媛県今治市	須恵器広口壺、土師質土器杯、土師質土器皿	火葬墓	須恵器広口壺は口縁部が打ち欠かれ、土師質土器杯を蓋として使用しているが、杯も底部が打ち欠かれ、皿を杯の蓋として使用。つまり、二重構造の蓋にしている。	谷若編1986
法花寺藏骨器A		愛媛県今治市	須恵器水瓶、須恵器蓋	骨蔵器	開墾中偶然発見。	谷若編1986
法花寺藏骨器B		愛媛県今治市	須恵器広口壺、和同開珎14枚	骨蔵器	開墾中偶然発見。	谷若編1986
古谷仙田岡遺跡	SK01	愛媛県今治市	土師質土器甕2個	祭祀	土師質土器甕が口縁部を下にして2個並べおかれている。	増田他編2020
四村日本遺跡	I-SP54	愛媛県今治市	土師質土器甕	祭祀		谷若編1998
かいなご3号墳	SX1	愛媛県松山市	土師質土器短頸壺、土師質土器杯蓋	骨蔵器	短頸壺・杯蓋ともに須恵器の焼成不良か?	田城他編1993
樽味四反地遺跡	地鎮門遺構	愛媛県松山市	土師質土器杯3個、須恵器甕、河石甕4個	地鎮遺構	須恵器甕内中央に土師質土器杯を置き、周囲に川原石を配置。須恵器甕は胴部中位から口縁部が欠けている。遺構プランは検出できていない。	小笠原他編2011

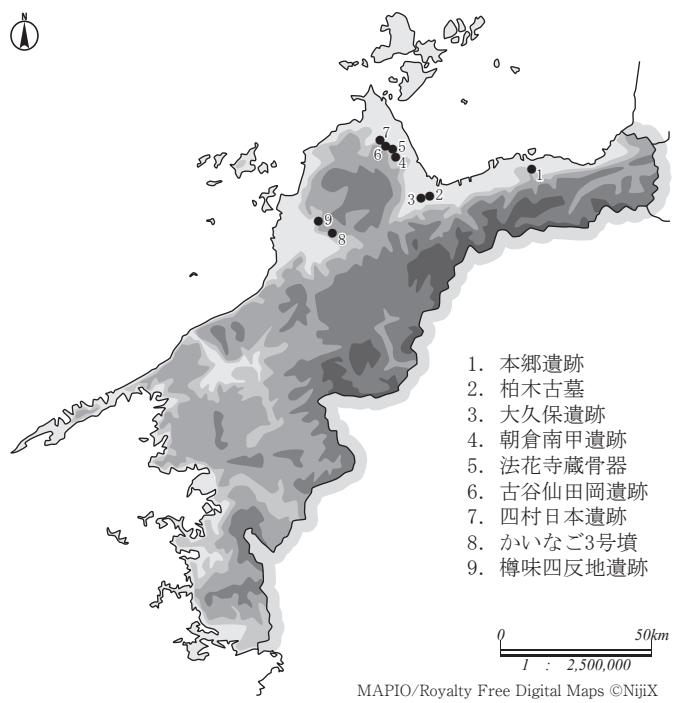


図5 愛媛県の土器埋納遺構出土遺跡

い。また、甕の最下位では泥化した有機物質が沈殿しているのが確認され、埋土とは明らかに異なる物質である点から甕を埋納した際の何らかの内容物と考えられている。内容物等の理化学的分析は実施されていないが、報告書では、平城京跡で本遺構のような類例があることを指摘し、いずれもが胞衣の埋納遺構の可能性があることから、SX13は胞衣壺として捉えられている。

久末京德遺跡は大分県国東市に所在する遺跡である(丸山編1991)。SX2は口縁部を打ち欠いた土師器壺に土師器杯を蓋として安置していた土坑である。土坑内には土師器杯が1枚置かれ、壺内からは何も出土していないが、土壤が堆積していた。この土壤を対象に脂質分析が実施され、動物性脂質が相当量存在していたことが推定されている(小池1991)。報告書では、SX2が胞衣埋納遺構である可能性が考えられている。

以上、周辺地域の胞衣壺と考えられている事例を取り上げた。土師質土器の甕および壺を土坑に埋設し、稻木遺跡SX13では甕の内部から銭貨が出土している。また、稻木遺跡SX13では、遺構埋土とは明らかに異なる土壤が甕の内部で確認され、久末京德遺跡SX2では脂質分析の結果、動物性脂質が検出されている。前述したように、別名端谷I遺跡2次調査の土器埋納遺構(SP36)では、脂肪酸分析を実施している。腐食や土壤生物由来の脂肪酸が発見されているが、埋納物等に由来する脂肪酸は検出されていない。また、土器の内部では、銭貨などの副葬品も確認できていない。そのため、土器埋納遺構(SP36)の性格として、胞衣壺の可能性は低いと推察される。

以上の検討の結果、土器埋納遺構(SP36)は骨蔵器・火葬墓の可能性が推察される。しかしながら、愛媛県内の骨蔵器・火葬墓の事例とはやや異なることや、埋土から骨片や灰などが確認できていないため、骨蔵器・火葬墓とするには決め手を欠いている。

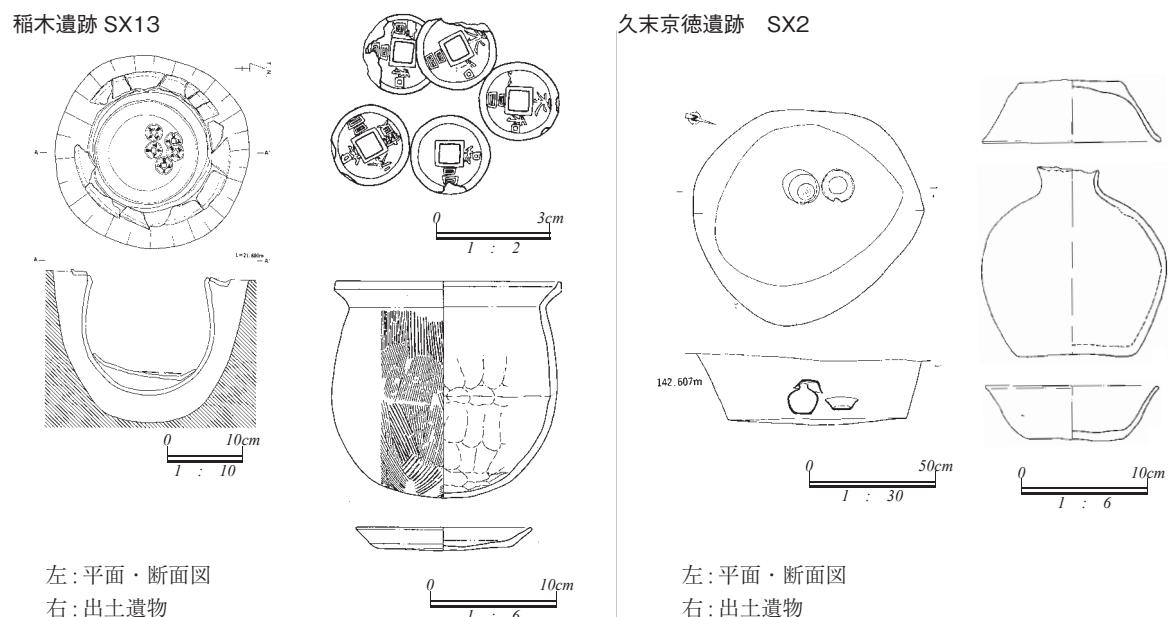


図6 胞衣壺出土事例(左:稻木遺跡 SX13、右:久末京德遺跡 SX2)

5 おわりに

以上、別名端谷Ⅰ遺跡2次調査で出土した土器埋納遺構(SP36)について、出土状況や土器内埋土の分析について報告したのち、本遺構の評価をした。その結果、土器埋納遺構(SP36)は骨蔵器・火葬墓の可能性を指摘した。しかしながら、骨蔵器・火葬墓とするにはやや不十分であり、周辺地域で確認されている骨蔵器・火葬墓の事例や、その他の土器埋納遺構と比較する必要がある。いずれにしても、本遺構は、土師質土器甕を遺構の坑底に埋設し、甕の上に土師質土器杯を蓋にして安置している土器埋納遺構であることは確実である。今後は周辺遺跡との関係性や歴史的背景、周辺地域の事例も踏まえて、本遺構の再評価をしていきたい。

最後になりましたが、本稿を執筆するに当たり、X線撮影では愛媛大学アジア古代産業考古学研究センターの村上恭通先生と笛田朋孝先生にご協力をいただきました。また、当センターには、未報告資料でありながら資料や図面の掲載を承諾していただきました。

以下の方々や調査機関には、多くの御指導や御教示を賜りました。末尾となりましたが、記して感謝いたします。(敬称略)

小田裕樹、神野恵、柴田圭子、首藤久士、乗松真也、松葉竜司、三好裕之、森川実

註

*1 別名端谷Ⅰ遺跡2次調査の内容は未報告であり、今後報告書が刊行される予定である。本稿で取り上げた土器埋納遺構(SP36)の評価に関しても今後の整理により本稿とは異なる見解が示される可能性がある。

*2 土壤選別は内容物の一部しか実施していない。そのため、全ての土壤を土壤選別や水洗選別をすることにより、骨片や炭化物などが発見されるかもしれないが、その可能性は非常に低いと思われる。

参考文献

- 青木聰志 2020 「愛媛県における古代～中世の土器編年 - 今治平野の9世紀から12世紀を中心に -」『紀要愛媛』第17号 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 青木聰志 2023 「別名端谷Ⅰ遺跡2次」『愛比壳』 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 池尻伸吾他編 2007 『別名端谷Ⅰ遺跡・別名端谷Ⅱ遺跡・別名成ルノ谷遺跡・別名寺谷Ⅰ遺跡・別名寺谷Ⅱ遺跡 今治新都市開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集』 埋蔵文化財発掘調査報告書第139集 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 今井信太郎編 1983 『実報寺黒岩山遺跡・広岡北谷山遺跡調査報告書』 東予市教育委員会
- 小笠原善治他編 2011 『樽味四反地遺跡-19次・20次調査-』 松山市文化財調査報告書第151集 松山市教育委員会 財団法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センター
- 小黒裕二他編 2000 『阿方春岡遺跡・阿方牛ノ江遺跡・矢田八反坪遺跡・矢田大出口遺跡・矢田平山近世墓・矢田平山古墳・矢田平山遺跡 今治北道路埋蔵文化財調査報告書』 埋蔵文化財発掘調査報告書第88集 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 小田裕樹 2011 「墓構造の比較からみた古代火葬墓の造営背景 - 畿内と北部九州を対象として -」『日本考古学』 第32号 日本考古学協会
- 久世康博 1999 「京都市域における埋納(祭祀)遺構の集成」『研究紀要』 第5号 京都市埋蔵文化財研究所
- 小池裕子 1991 「大分県安岐町久末京徳遺跡出土の壺型土器内土壤の脂質分析について」『久末京徳遺跡』 安岐町文化財調査報告書第1集 安岐町教育委員会

坂井良輔・小林正史 1995 「脂肪酸分析の方法と問題点」『考古学ジャーナル』386 ニューサイエンス社
パリノ・サーヴェイ株式会社 2022 『令和4年度 今治道路埋蔵文化財調査に伴う理化学分析(脂肪酸分析)業務』
パリノ・サーヴェイ株式会社

田城武志他編 1993 『かいなご3号墳・平井谷1号墳』松山市文化財調査報告書第31集 松山市教育委員会
谷若倫郎編 1986 『朝倉南甲遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
谷若倫郎編 1998 『四村日本遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第71集 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
柴田昌児他編 2008 『大久保遺跡(大久保・竹成・E地区)・大開遺跡・松ノ丁遺跡(1次・2次)』埋蔵文化財発掘
調査報告書第144集 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

西岡達哉編 1989 『稻木遺跡 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第六冊』香川県教育委員会
西川真美編 2018 『長沢元瀬遺跡・長沢二反地遺跡 -一般国道196号今治道路(湯ノ浦IC～朝倉IC間)埋蔵文化
財調査報告書 5-』埋蔵文化財発掘調査報告書第192集 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター

正岡睦夫 1991 「愛媛県越智郡朝倉村出土の和同開珎」『遺跡』第33号 遺跡発行会
正岡睦夫 1993 「愛媛県今治市国分出土の和同開珎」『遺跡』第34号 遺跡発行会
正岡睦夫 1995 「伝愛媛県小松町出土の統一新羅土器」『古文化談叢』第35集 九州古文化研究会
正岡睦夫 1996 「愛媛県朝倉村ふるさと美術古墳館保管の和同開珎」『遺跡』第35号 遺跡発行会
正岡睦夫 1996 「愛媛県周桑群小松町柏木古墓出土の和同開珎」『遺跡』第35号 遺跡発行会
正岡睦夫 1997 「愛媛県における古代の火葬墓」『古代学研究』第139号 古代学研究会
増田晴美他編 2020 『吉谷尾ノ端遺跡 吉谷仙田岡遺跡 吉谷横枕遺跡 吉谷立丁遺跡 吉谷高木遺跡 吉谷坪ノ
内遺跡 吉谷ショクガ谷遺跡』公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第199集 公益財団法
人愛媛県埋蔵文化財センター

真鍋昭文編 2010 『本郷遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第161集 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
丸岡啓子編 1991 『久末京徳遺跡』安岐町文化財調査報告書第1集 安岐町教育委員会

挿図出典

図1：筆者作成 図2：愛媛県埋蔵文化財センター提供の図面を元に筆者作成 図3：筆者実測 図4：小黒他編
2000、谷若編1998、西川編2018を引用 図5：筆者作成 図6：西岡編1986図222～224、丸山編1991図54、
55を引用、一部加筆 表1：パリノサーヴェイ株式会社2022を引用 表2：筆者作成 写真1：愛媛県埋蔵文化
財センター撮影の写真を元に筆者作成 写真2：愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター撮影の写真を元に
筆者作成

(2023年1月27日)